

1. 黴による害の中で黴の色素による着色、褪色は強度低下と共に最も大きい劣化現象である。本報では布上に生育した黴を分離培養し、それらの分離菌で綿布を汚染させて様相を観察し、併せて除去法を検討した。

2. 放置した布の抽出液をサブロー培地上で培養して発生した菌、および食物等のしみを付着させた布上に生育した菌を分離し、純粋培養してその形態、固形培養所見、発育状況により種類を検討した。その中の *Aspergillus sp*, *Hormodendrum sp* 等孢子あるいは菌糸に色素を有する黴数種をツァベック培地を用いて綿布上に大量に生育させ、汚染させた後その菌核を機械的に除去出来るだけ除去し、後洗剤液、有機溶剤、漂白剤等による除去を試みた。

3. *Rodotrala* の様な集落表面が赤く、粘液堤を形成する黴でも水洗により完全に除去可能なものも認められたが、*Hormodendrum sp* の様に黒色の汚点になるものは完全な除去は困難で、検鏡の結果かなり菌糸が残っている事が認められ、中には深部まで浸入しているものも認められた。また *Aspergillus sp* の中には培地中に色素が拡散されて、鮮明な色を呈したが、洗浄により僅に黄色味を残すだけのものもみられた。いずれも表面はかなり着色していても裏面迄汚染されていないものが多く、早い時期に機械的操作により孢子や菌糸がかなり除去されるが、日が経つにつれ除去困難な事が再確認出来た。